特集　くらしに寄りそった情報伝達とは

05

コミュニティ・アーカイブから考えるメディアと私の関わり方
～「3がつ11にちをわすれないためにセンター」への取材をもとに～

長島 洋介（ラボラトリオ株式会社マネージャー・奈良女子大学なら学研究センター協力研究員）

「せんだいメディアテーク」の外観
（ホームページより引用）

誰もが記録の主体になれる時代に

アーカイブは、一般的に個人や組織が活動する中で作られる様々な記録（文章、映像、音声、製作物、アート等）を収集・保管する活動・場所を示すと捉えられる。簡易的に分類すると、図書館は書籍等を、美術館は芸術品等、博物館は歴史を示す記録等、報道メディアは記事（文章・映像）等、目的に応じた記録を“アーカイブ（収集・蓄積）”し、時に利活用（発信・展示）している。

こうしたアーカイブ活動は、司書・学芸員・報道記者といった各分野の専門家が担うものであると認識されている。しかし、記録という行為に着目すると、誰もが生活の中で営んでいるものである。そして、それらの記録物は蓄積され、時には個人がホームページ等で発信することも増えている。乱暴な表現になるが、誰もが何らかのレベルで、広い意味でのアーカイブ製作者だとも言える（公開・非公開を問わなければ）。

こうした社会・組織単位のアーカイブと個人単位のアーカイブの狭間に、「コミュニティ・アーカイブ[1]」があるといえる。ここでいうコミュニティは地域コミュニティを指すだけでなく、興味関心・属性等によるものも想定される。コミュニティ・アーカイブというワードが使われ始めたのは比較的近年ながら、本質的にはコミュニティによる／コミュニティのためのアーカイブであり、古くから営まれてきたものと言える。例えば、各地に残る石碑群は未だに多くの情報を私たちに残すアーカイブ形態のひとつといえる。

本号のテーマと照らし合わせると、「メディア・情報との向き合い方」の中には、情報を享受するだけでなく、情報を生み出す主体としての向き合い方も含まれるはずである。そこで、本稿では「コミュニティ・アーカイブ」という誰もが記録者・発信者・利活用者になりうるメディア形態に注目し、情報との向き合い方を考えたい。この目的に沿って、今回は東日本大震災を契機に開設された

「3がつ11にちをわすれないためにセンター」の皆様に話を伺うことにした。

3がつ11にちを わすれないためにセンター

東日本大震災後、東北地方を中心に様々なアーカイブが生まれており[2]、「3がつ11にちをわすれないためにセンター（以下、わすれン！）」もその一つとなる。「わすれン！」は宮城県仙台市の生涯学習施設「せんだいメディアテーク」内にあり、記録や発信を通じて震災に向き合う人と一緒に活動を続けている。市民、専門家、アーティスト、スタッフが協働し、映像、写真、音声、テキストなど様々な記録の活用を通じて、復旧・復興のプロセスを蓄積、発信していくプラットフォームとなっている。2022年現在まで、プロ・ノンプロによる様々な震災伝承のための記録が蓄積・利活用されているが、極めて具体的な経験である東日本大震災を通じて「わすれン！」を立ち上げ、取り組む過程でコミュニティ・アーカイブという言葉と出会い、アーカイブ活動とはどういうものであるのか、探りながら取り組まれている。こうした特徴は、地域に根ざした草の根・参加型のコミュニティ・アーカイブであると言えよう。

主な「わすれン！」の活動は、様々な人が関わり、アーカイブ作成する「記録と収集」活動と、WEBアーカイブ（図1、2）

図1.「わすれン！」HPトップ画像（2022/12/9時点）https://recorder311.smt.jp/

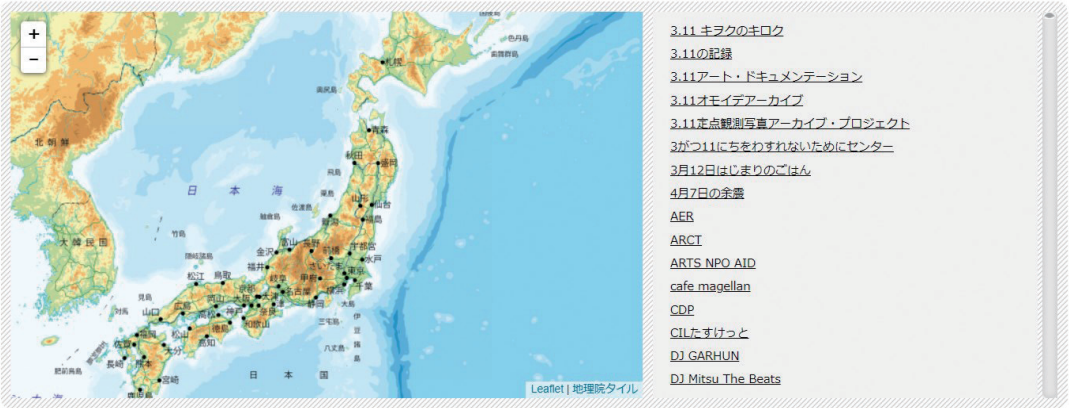

図２. WEB ライブラリー「キーワード」https://recorder311.smt.jp/tag/

やライブラリー、展示、二次利用等の「記録の利活用」活動に分けられる。前者については、多くは経験・スキルを持たない市民（ノンプロ）の参加を重視しているため、取材機材･スタジオスペース（編集や配信）･スキル取得支援等、サポート体制が整えられている。

ただし、参加者に対して、「わすれン！」として指示をすることはなく、各個人の動機に基づく参加･活動が重んじられている。それゆえに、参加申込に当たっては、その動機ややりたいことを詳しく聞くこともある。あくまで参加者の主体的な活動が担保され、将来的に協働できるような雰囲気・場づくりが試みられている。そのため、自分たちの住んでいた地域を自分たちの手で記録に残したいという動機があれば、機材または編集技術がないという場合でも、スタッフがサポートする。時に、専門家･アーティストとのマッチングを行い、講習などの具体的な個別支援をすることもあるという。

また、非営利の震災伝承活動に限定し、記録物を自由に使える権利をシェアしていくことが「わすれン！」で記録を預かる上での決め事にされている。メンバー間はもちろん、第三者から二次利用の申請があった場合にも貸し出しており、そのため、記録を預かる際、著作権はあくまで記録者に残しながら、非営利の伝承活動に関する「包括的利用許諾書」を取り交わしている。また、肖像権の問題も発生しうるため、協力者に肖像権使用許諾書を書いてもらうための、自由に活用できるフォーマットが用意されている。ただし、震災直後の記録など、肖像権処理がされていない場合には、時にはコミュニティの方に閲覧してもらい、ＮＧとなった記録は公開から除く等の個別対応にも注力されていた。個々人でできる範囲を超えている部分もあるため、相談を受けながら安心して記録・利活用できる環境づくりがなされている。

以上に見られるように、「わすれン！」では参加希望者・参加者のニーズを聞き取りながらサポートすることを通じて、今では自分で撮影ができる、編集もできるメンバーが育っている。参加者の中には、当時から現在まで活動している人もいれば、10年という年月を経て震災と向き合うことができ、参加に至る人もいるということである。

このように元々の趣旨が担保される場づくりが丁寧になされている。前提として、参加する個々人に「記録したい動機」があるからこそ、自主的に撮影・編集に取り組んだり、時に必要な技術を身に付けたり、記録上のルールも守られたりと、「わすれン！」活動全体の風土が作られている様子が感じ取れた。

「わすれン！」の現在

震災から10年の月日が流れ、多くの記録が集まってきている一方で、被災地を取り囲む状況も大きく変化し、活動の振り返りがなされていた。その中で、数多の記録を如何に埋もれさせずに、多くの人に触れてもらうか、その利活用は大きなテーマにあげられているという。記録の利活用に向けた取り組みはこれまでもなされてきたが[3]、新たな取り組みも絶えず模索されている。まずは、記録の保管・貸出に加えて常設展示スペースを備えた「わすれン！資料室」として、より身近に触れることができるスペースが設置された(図3)。また、Twitterで過去の記録を掘り起こして紹介する「わすれン！バックナンバーズ」などの試みも行われている。

いったん10月末で終了したということだが、これは数々の記録に新たな光を当てるとともに、「わすれン！」の活動を途切れさせないことを企図したものだという。

その他、2019年から「わすれン！録音小屋」という取り組みも始まった。これは、館内に2人ほどが入れる小屋を設置し、その中で震災に関して語り合い、録音・アーカイブ化していく活動である。これは、時間の経過に伴って震災の話をする機会が減る中で、まだ語れていないことが数多くあるという声に応えたものとなっていた。このように、「現在（録音時点）における語り」に焦点を当てられたコンテンツが共生している「わすれン！」というアーカイブ環境からは、記録が本来もつ豊かさに立ち返らせてくれる可能性を感じとれよう。

図3. わすれン！資料室（HP写真より）

図4. 展示スペースと「わすれン！録音小屋」（HP写真より）

震災から10年も！ 10年しか？

震災を記録する／語るには、本人にも何らかの痛みを伴うことがありうる。震災直後から記録に赴く人がいる一方で、10年という歳月を経て、語れるようになった人がいるのはそのためかもしれない。「自分が何かを語れる立場にない」と無力感を感

じていた子供が成長し、記録・発信活動をはじめることもあれば、震災時に遠方に住んでいた人がいちどの帰郷を契機に記録作品を始めたこともあるそうだ。これらは、これまで向き合えずにいた贖罪の気持ちが記録や創作といった形で昇華されているのかもしれない。いずれも 10 年という月日の大きさを感じるエピソードである。

先にも軽く触れているが、震災から 10 年が経過する中で、世間的にも一区切りとされつつある。そのため、社会から「わすれン！」がこれからどうなっていくのか、問われる時期に差し掛かっている。時が流れ、確かに参加者数のみに着目すると減り続けており、資料件数も他の施設・機関に比べると多くはないかもしれないという。しかしながら、社会全体としてはどうしても現在に目が向けられがちな中で、先にあげたエピソードは大きな問いを社会に投げかけてきているように感じる。

「わすれン！」が取り組むアーカイブスは、資料の物量・質以上に、記録する取り組み、市民における動機をもった活動そのものを如何に公共の場で蓄積していくことができるか、に力点が置かれていると言える。このように目に見える成果としての記録だけでなく、その記録・収集・発信の中で培われているプロセスに目を向けると、「わすれン！」自体が時に社会の流れとは異なる個々の人の意識の変遷に寄り添い、それを記録する媒体になっている姿が見えてくる。

生涯学習としての
コミュニティ・アーカイブ

また、「わすれン！」を運営する「せんだいメディアテーク」は、前述通り、市の生涯学習施設である。一般的な市民センター等と比べると、図書館などの機能が複合的に備わる大きい枠組みを持っており、市民による市民のためのメディアシステムの場のような施設になっているという。その中に「わすれン！」があるわけであり、そのために、市民が記録活動を行う上で、時には問題に直面しながらも主体的に取り組むことを重んじ、それをサポートするという基本スタイルが通底されていた。肖像権等、慣れないことでも自ら取り組み、悩みや相談したいことが生じたら、「わすれン！」がしっかりと受け止める。そうした市民の実践を促進する場が目指されていた。

震災に関わらず、多くのボランティア活動の源泉には「何かの役に立ちたい」「何かに役立ててほしい」という思いがあり、「わすれン！」はそうした個々人の思いを尊重する仕組みになっている。ただし、誰もが自身の意思や動機が明確に／具体的になっているわけではなく、自分の本当の目的を見いだせるか、それをサポートできるのか、という点は課題意識の一つにあるという。生涯学習の観点から眺めた時、単に地場の記録収集に留めず、地域住民、特に「わすれン！」の場合には震災と関わり・接点を持ち続けたいという意思をもった人たちが何かを学んでいける状況を作る／維持することが根本にあり、結果としてアーカイブが成立するという流れが汲み取れた。

このように、生涯学習をもとに改めて活動を読み解くと、メディアリテラシーの育成という観点からは、情報を適切に読み解くだけではなく、記録者・表現者・発信者としての向き合い方まで、参加者が学べる環境が構築されていると見受けられた。こうしたコミュニティで育まれるアーカイブが維持・発展をしていく上で、参加者のスキルをサポートするだけではなく、各時点

での思いや熱量に寄り添える仕組みが求められると感じる。

コミュニティ・アーカイブの課題・可能性

あくまで「わすれン！」というひとつの活動からになろうが、最後にメディアとしてのコミュニティ・アーカイブの課題・可能性を伺った。

まず、すべての被災地が同等に報じられたわけではく、どうしても取りこぼされてしまう地域が存在する中で、やはり土地ごとに、そこで生活を営んでいた人の実感があって初めて生み出される記録の大切さを痛感しているという。そこで、個人的な視点で記録されてきたものを多くの人に伝えるために、個人性を守りながら、どう語り継いでいくとよいか、試行錯誤が続けられている。

また、実践者になることの大切さが改めて語られた。発信する、記録する立場になってこそ、初めて見える景色がある。流暢に語れなくなることもあろうが、実践者となることで見え方（解像度）が変わり、他者が抱える色々な葛藤を感じ取れる感受性も身につく。そして、情報から見えてくる想像のあり方も育まれていく。それは、普通に生活している上でも、他の人を想像する上で、密接に関わるはずだという。

そして、一般的にアーカイブは保存・蓄積するものという認識が強い中で、そこにある様々な時間感覚をどのように保ち続けていくか、という点も指摘された。個人が、他者も製作プロセスも挟まず、リアルタイムに様々な情報を世に出せる時代である一方で、公共における東日本大震災を契機に設立されたアーカイブの中にはすでに停止したものもある。日本人に限らず、漠とした「将来」「未来」という言葉を、具体的な数値としてイメージするときに、100年、200年を考えて、それに基づいた技術や制度設計が（ことコミュニティの活動を支える公的機関には）必要であろう。デジタル時代だからこそ、未来に向けて何かを残すために、長い時間感覚で未来を想像することを今の時点で如何に意識できるか。アーカイブを創る立場からの大切な問いを伺い、取材を終えた。

取材を終えて

「わすれン！」への取材を通じて、コミュニティ・アーカイブという観点から、メディアと“私”のこれからの関係性について、多様な見立てができる可能性を感じとることができた。記録（ある時点では語りつくせないものも含めて）をその軌跡とともに残せることは、自分たちの振り返り、新しい発見の可能性を未来につなぐことにもなろう。それは、公私を跨ぐ“共”的な空間（コモンズ）であるからこそ連鎖を引き起こすものであるのかもしれない。その際、学び合いという視点が加わることで、絶対的な答えがない社会状況の中で、記録を作り合う参加者の方と共に試行錯誤がなされ、そうしたプロセスが重視されている点は示唆に富んでいる。

このように自らのメディアとの関わり方について、記録から発信までのプロセスの中で改めて位置づけ直すことができれば、より豊かな「市民による市民のためのメディアシステム」が構築されるのではないだろうか。その際、「わすれン！」のように、コミュニティ・アーカイブ自体が持つ思想・美学が必要になってくるように思わ

れる[4]。

【謝辞】本稿は「3 がつ 11 にちをわすれないためにセンター」の皆様（小川氏・佐藤氏・白川氏）へのオンライン取材により執筆しました。ご協力いただいた皆様への感謝とともに、文責は筆者にあることを添えさせていただきます。

注

1　例えば、「コミュニティ・アーカイブをつくろう 佐藤・甲斐・北野 , 2018, 晶文社)」「特集 コミュニティ・アーカイブ（2018, デジタルアーカイブ学会誌 2 巻 4 号)」

2　例えば、コミュニティアーカイブとしての東日本大震災アーカイブ―オープンデータ連携による利用性の向上（杉本、三原、永森 , 2018, デジタルアーカイブ学会誌 2 巻 4 号）

3　イベント展示に加えて、二次利用の促進に向け、2015 年には活動報告書、2020 年には目録形式の資料カタログなども作成されてる

4　「2021 年 4 月美術手帖：アーカイヴの創造性」などでは、アーカイブが持ちうる創造性への言及もなされている